

マックス・ヴェーバーにおける「科学的問題」とは

三笥 利幸ⁱ

本稿は、マックス・ヴェーバーの『社会科学および社会政策の認識の「客観性」』論文における一文の解釈から出発しつつ、ヴェーバーにとって「科学的問題」とは何かをあきらかにするものである。ヴェーバーの『客観性』論文は、ハインリッヒ・ブラウン編集の旧雑誌『社会立法・統計アルヒーフ』から引き継がれた新雑誌『社会科学・社会政策アルヒーフ』の網領的論文であり、そこで『アルヒーフ』の「傾向」が論じられている。新『アルヒーフ』の編集者のひとりであるヴェーバーは、『アルヒーフ』は寄稿者によって一定の「性格」が刻印されることは不可避であるが、編集者が寄稿者を選別するような「傾向」を持つことはないと断言する。ここで示された、雑誌がひとつの「性格」をもってしまうということは、ひとえに「科学的問題」が実践から生まれるからであり、科学と実践が切り結ぶところに「科学的問題」が存在するとヴェーバーは考えていたことを意味する。こうしたヴェーバーの「科学的問題」の捉え方は、世紀転換期に乱立した諸「科学」にヴェーバーがどのように対峙し、彼の科学をどのように形成していったのかを考える上で重要な基礎となるものである。

キーワード：マックス・ヴェーバー、科学、実践、客観性

はじめに

私が学部学生の頃、わかりもせずにしたマックス・ヴェーバー『社会科学および社会政策の認識の「客観性」』„Die „Objektivität“ sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis“（『客観性』と略す）は、経済学者で戦後ヴェーバー研究の一翼を担った出口勇蔵¹⁾の訳だった。岩波文庫版の富永祐治・立野保男訳——『社会科学方法論』と題されていた——があることは知っていたが、すでに新本で見かけることはなかった。この出口訳が収録された訳本²⁾を私は新本で手に入れることができたのだが、それもすぐに書店の棚から消えた。

『客観性』は長らく新本では手に入らない状態が

続いたが、1998年に折原浩が補訳者となり、岩波文庫版富永・立野訳が「復活」することとなった。それ以降は、この折原補訳を授業やゼミの共通のテキストとして指定できるようになり、私の担当した2018年度前期の大学院の授業でも、このテキストを底本として参加学生と『客観性』を丁寧読んでいった。そのなかで、これまで正直あまり真剣に検討していなかった箇所訳のおかしさに気づいた。わかたつもりになっていたが、どうも腑に落ちないのだ³⁾。

以下でその箇所について検討を加えていくが、本稿が目指すのは折原補訳をはじめとする訳業の不適切さをあげつらうことではまったくない。私の示す解釈も、ほんとうにそれが正しいのかどうかはヴェーバー本人のみぞ知るところがある。本稿は、訳文の問題から出発しつつも、ヴェーバーの「科学的問題」とは何かを探ろうとするものである。

i 立命館大学産業社会学部教授

1. 『客観性』第14段落にある一文の 解釈について

私が『客観性』のなかでひっかかったのは、第14段落の次の箇所——原文では一文——である。当該箇所について、まずは折原補訳を引用する。なお、折原補訳を含め、これ以降で訳文を示す際にはすべて、傍点を振った箇所は原文でゲシュペルトになっている箇所である。

こうした契機は、それ自体、熱狂的な党派的偏狭と、未熟な政治文化の徴候として、なんとしても克服されるべきことではあるが、それは、われわれのような種類の雑誌においては、つぎの事情によって、本質上顕著に現れる。すなわち、社会科学の領域においては、科学上の問題が提起され展開される最初のきっかけは、経験上、実践的な「問題」によって与えられるのが普通であり、そのため、すでに、ある科学的問題の存在を認めること自体からして、ある特定の方向に向けられた、生ける人間の意欲と個人的に結びついている、という事情である。[折原補訳: 50] (下線は引用者による)

次に原文を引用する。なお、ドイツ語原文の引用については以下すべて、イタリックは原文ではゲシュペルト、下線は引用者によるものである。

An sich als ein Zeichen parteifanatischer Beschränktheit und unentwickelter politischer Kultur unbedingt bekämpfungswert, gewinnt dieses Moment für eine Zeitschrift wie die unsrige eine ganz wesentliche Verstärkung durch den Umstand, daß auf dem Gebiet der Sozialwissenschaften der Anstoß zur Aufrollung *wissenschaftlicher* Probleme erfahrungsgemäß regelmäßig durch *praktische* »Fragen« gegeben wird, so daß die bloße Anerkennung des Bestehens eines wissenschaftlichen

Problems in Personalunion steht mit einem bestimmt gerichteten Willen lebendiger Menschen. [Archiv 19: 34=MWGII/7: 158]⁴⁾

折原補訳を読んでも、ヴェーバーの思想や主張と著しく異なるようにも思えず、これまでそれほど違和感を感じることもなかった。しかし、下線を付した「個人的に結びついている」という表現の意味が、自分自身とらえられていないことに今回気づいた。そこで、原文と照らし合わせてみると、この箇所は素通りできないものだと思いますのである。

社会科学において、科学的問題は実は実践的な問題から与えられるが、それはその科学的問題を考える者の個人的な意欲、個人的な関心と密接な関連がある、というくらいの意味で考えれば、こは読めてしまう。しかし、ヴェーバーの書いた原文をみれば、この in Personalunion が含まれる節の動詞は steht であり、文法上、daß から steht までに挟まれた die bloße Anerkennung des Bestehens eines wissenschaftlichen Problems in Personalunion はひとまとまりで主語のはずである。ところが、折原補訳は、die bloße Anerkennung des Bestehens eines wissenschaftlichen Problems を主語とし、in Personalunion を副詞句として切り離して解釈する訳文となっているようだ。しかし、これは文法的に無理があるのではないか。ひとまずは文法的に無理のない解釈をした上で、それでも意味が通らなかつたり、特殊な事情を勘案すべきことがあつたりすれば、別様の訳を考えるべきだろう。私は、とりあえずは文法に従った解釈を試みる必要があると思うし、そう考える訳者が他にいたのではないかと、折原補訳以外の訳についても調べてみた。しかし、私の見解と一致するものは見当たらなかった⁵⁾。

さて、ではこの一文はどのように解釈すべきなのか。折原補訳のように通常の文法にとらわれない解釈の必要があるのか。それとも、文法的に in Personalunion までを主語とすることで、この箇所の妥当な解釈へと至るのか。これを考えるために、

『客観性』が執筆されるに至る経緯、なかんずく『客観性』が掲載された『社会科学・社会政策アルヒーフ』の成立の経緯に立ち戻って検討してみたい。

2. 『社会科学・社会政策アルヒーフ』の 成立事情

『客観性』が掲載された『社会科学・社会政策アルヒーフ』の成立の経緯については、安藤英治による研究〔安藤 1983〕〔安藤 1992〕があり、ヴェーバーをメインにした研究ではないが、水田洋〔水田 1985〕や亀島庸一〔亀島 1995〕らの重要な研究もある。また、私もすでにこれらの研究をふまえて一文を書いたことがある〔三管 2004→2014〕。さまざまな論点についてはこれらを参照してもらうとして、以下では本稿に必要な限りでその成立経緯を見ていきたい。

2-1. 『社会立法・統計アルヒーフ』の創刊と売却

『客観性』が掲載されたのは、1904年の『社会科学・社会政策アルヒーフ』*Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*の「創刊号」だとされる。しかし、『社会科学・社会政策アルヒーフ』は、『社会立法・統計アルヒーフ』*Archiv für soziale Gesetzgebung und Statistik*という雑誌の後継雑誌であり、まったく新たに「創刊」された雑誌ではない。この『社会立法・統計アルヒーフ』（旧『アルヒーフ』と記す）は、社会民主党で「修正派」に属するとされるハインリッヒ・ブラウン Heinrich Braun⁶⁾の編集によって1888年に創刊された雑誌で、1903年に通算18巻を数えるまで刊行されたものである。それゆえ、後継雑誌である『社会科学・社会政策アルヒーフ』（新『アルヒーフ』と記す）は、「創刊号」が第19巻となっている。ヴェーバーが『客観性』を書かねばならなかった事情はさまざまあろうが、その大きな理由の一つは、こうした旧『アルヒーフ』から新『アルヒーフ』への移行というものだった。

旧『アルヒーフ』の成立経緯そのものについては

すでに述べたことがある〔三管 2014: 170-3〕ので繰り返さないとして、ここでは、ブラウンが旧『アルヒーフ』をどのような方針で編集していたのかを確認したい。

ブラウンは、旧『アルヒーフ』を発刊するにあたり、「創刊によせて」„Zur Einführung“という小文を第1巻に寄せている。そこには、当時、ドイツの工業化、都市化とともにきわめて大きな問題として立ち現れたのが「労働者問題」であり、それへの対応が喫緊の課題だという意識が強くあらわれている。

生産様式のきわめて速い発展がもたらした経済的な大転換は、その最も明確な社会的表現を近代の質労働者階級に見ることができる。〔Archiv 1: 1〕

周知のようにドイツでは1878年にビスマルクによって制定された社会主義者鎮圧法により社会民主主義的活動が弾圧されていた。旧『アルヒーフ』はまさにその直中で創刊されることになる。ブラウンは次のように述べている。

国家は、それ特有の諸領域において、この新しい階級（「労働者階級」を指す——引用者）により多くの調査を行い、彼らの特別な要求をとくに考慮した処遇する法律を制定しなければならない。／この最後のもの（「立法」を指す——引用者）の整備において最も重要な前提のひとつは、社会状況の科学的調査と確定である。〔Archiv 1: 1〕

ブラウンの言葉から、旧『アルヒーフ』を『社会立法・統計アルヒーフ』と題したことが端的にわかるだろう。労働者問題への対応のための立法が不可欠であり、そのためには科学的な社会調査によって社会状況を正確に知る必要がある。そうした要請に応えるものとして旧『アルヒーフ』は位置づけられた。

われわれは科学的検討をいい、それをこの雑誌の特徴とした。実際、雑誌の性格は最終的に科学的な性

格 Charakter となるべきであり、また、そのように性格づけられるようにたえず配慮しなければ、その性格は制約を受けてしまうだろう。この雑誌において、社会統計および社会立法の領域にたいして、より自由であらゆる面に対してなんの制約も受けない研究の場が生み出されなければならない。そしてその研究は、その対象に予断なく接近し唯一の目的を追求する。それはすなわち科学的真理である。

[Archiv 1: 5]

最終的に18巻まで刊行された旧『アルヒーフ』には、ヴェーバーはもちろん、多くの識者が論考を寄せ、新『アルヒーフ』の編集者のひとりとなるゾンバルトも幾度となく寄稿した⁷⁾。しかし、この旧『アルヒーフ』はブラウンの「政治活動への専念」[Archiv 18: V=告別の辞: 171-2]——帝国議会議員への立候補——のために売却され、ヴェーバー、ゾンバルト、ヤッフエの3名がその編集を引き継ぎ、新『アルヒーフ』となるのである [亀島 1995: 186-8] [三管 2014: 173-4]。

旧『アルヒーフ』第18巻つまり最終巻には、ブラウンによる「告別の辞」„Abschiedwort“ が載せられている。このなかで、ブラウンは自身が「社会民主主義者」であること、旧『アルヒーフ』を「社会問題の最重要部分を科学的に研究する中心点」としようとしたこと、「社会の事実上の状態にかなする科学的に不偏不党の、仮借ない叙述」を目指したことを、再度確認している [Archiv 18: V=折原訳: 170-1]。もちろん、ドイツ社会民主党内部で修正主義の立場を強めていくブラウンが編集者であった旧『アルヒーフ』誌上で、科学的な不偏不党性がどこまで実現できていたかについては、別に検証が必要であろう。しかし、ここではその検討はとりあえずおいておいて、ブラウンが述べた編集方針は旧『アルヒーフ』創刊から最後まで「科学性」の追求だったことを確認しておこう。

この「告別の辞」が掲載された旧『アルヒーフ』第18巻の巻末には、ヴェーバー、ゾンバルト、ヤッフエ

という新編集者3名の連名による「移行予告⁸⁾」がある。「告別の辞」に呼応するように、この「移行予告」には以下のようにある。

編集者は替わっても、創刊以来この雑誌に特有の一般的性格には何ら変わりはない。いっぽうで事実を、他方では動機と実践的帰結という点において立法を、厳に不偏不党の立場でいかなる党派のあるいは学派的見解にも縛られずに分析するという科学的手段によって、実践的および社会政策的研究を促進することが、将来にわたってもこの雑誌の主要課題となるだろう。[Archiv 18=折原訳: 165]

このように『アルヒーフ』は、新旧ともにその「科学性」を前提とすることが確認されている。では、ヴェーバーたちは新『アルヒーフ』でその「科学性」をどのように担保するのか。節をあらためてみていこう。

2-2. 『社会科学・社会政策アルヒーフ』創刊

新『アルヒーフ』創刊にあたって、創刊号である第19巻の冒頭には「緒言」„Geleitwort“ なるものが掲載されている。マリアンネは、「緒言」はヴェーバーが起草したという [Weber 1926: 290=1963: 221]。しかし、この「緒言」が収録された『全集』第1部第7巻の「緒言」に付された「編者報告」によれば、ゾンバルトのブラウン-フォーゲルシュタイン宛の1927年4月5日の手紙には「その論文(「緒言」を指すものと思われる——引用者)は私(ゾンバルト——引用者)が作成、マックス・ヴェーバーは非本質的な部分を補完したのみである」[MWGII/7: 123]と記されている。また、1903年1月6日のヴェーバーからヤッフエ宛の手紙には、次のように書かれている。

私の考えでは、アルヒーフの「傾向 Tendenz」の問題は、冒頭の言葉には入れないでおこう。それに関して何か適切なことを手短かに言うのはやめにしてお

いて、私のもっと長い論文でそれについては取り扱う。[MWGII/4: 195]

ヴェーバーは『アルヒーフ』の「傾向」について「緒言」では言及しないという意向を明確に示し、それについては、自分のもっと長い論文つまり『客観性』で述べるとヤッフェに伝えていた。こう見てくると、ヴェーバーは「緒言」にかかわってはいるし、共同の編集者としてそれを大筋で認めてはいても、ヴェーバーが考えていることが「緒言」にそのまま尽くされていると前提してはいけないうだ。というのも、「緒言」には、ヴェーバーが扱わないと述べたはずの「傾向」についての言及が見つかるからである。以下、「緒言」についてみていこう。

「緒言」では、旧『アルヒーフ』は「純然たる科学的事実認識」とともに「立法の経緯に関する批判的究明を課題とし」ていたから、それは社会科学だけでなく実践つまり社会政策とも関わっていたという [Archiv 19: III = MWGI/7: 128 = 緒言: 177]。ならば、旧『アルヒーフ』は「この「実践的」批判において、ある特定の「傾向」を帯びていたのではないか」、つまり、「特定の「社会政策上」の立場を代表していたのではないか」という疑問が出てきてもおかしくない [Archiv 19: III = MWGI/7: 128 = 緒言: 177-8]。

……彼ら（旧『アルヒーフ』への寄稿者——引用者）に共通の科学的関心とは別に、彼らが一定程度合意した理想、あるいは、原理上の観点が、彼らを結集させ、そうした理想や観点から、実践上の格率を導き出すことができたのではないか [Archiv 19: III = MWGI/7: 128 = 緒言: 178]。

寄稿者は共通の理想や観点から旧『アルヒーフ』に結集し、そのためにひとつの社会政策的な立場から一定の格率を示すことになったのではないか。この問いかけに「緒言」では、ある意味あっさりと次のように答える。

実際、そのとおりであったし、また、この雑誌の成功は、ある意味ではまさしくこの統一的性格に根ざしていた。すなわち、そうした実践的「傾向 Tendenz」は、決定的な点で、考慮されねばならない歴史上また社会政策上の情勢についての一定の洞察の結果以外の何ものでもなかったというこの事情ゆえに、この雑誌の成功もたらされたのである。

[Archiv 19: III = MWGI/7: 129 = 緒言: 178]

みられるように、特定の社会政策的立場を代表する「傾向」をもっていたからこそ旧『アルヒーフ』は成功したと述べて、「傾向」を持ったこと自体を問題として深く追求することはない。そればかりか、「傾向」があったことは旧『アルヒーフ』にとってメリットであったかのようにとらえている。ブラウンが編集者であったことからすれば、この「緒言」では、旧『アルヒーフ』が社会民主主義的な、ブラウンの意向が色濃く表れている雑誌であったという判断が下されているようにも読めてしまう。

しかし、他方で、この「傾向」を認めつつも、「緒言」には旧『アルヒーフ』について、以下のような評価をしているところもある。すなわち、旧『アルヒーフ』が国境を越えてきわめて広範囲に資本主義の考察を行ったために「他の機関誌にはみられないほど顕著な「国際的」性格」を持ち、そこに集う執筆者の「人的な国際性」も獲得したし、創刊当初から「科学的性格を強調してい」たために、執筆者は単に国際的であるだけでなく、「あらゆる党派的陣営」から集められることになり、「われわれの専門領域において真に「超党派的」な、最初の雑誌となった」というのである [Archiv 19: III = MWGI/7: 127-8 = 緒言: 177]。

厳密に言えば、「緒言」には矛盾があるのではないだろうか。科学的性格、執筆者の国際性、超党派性をいいながら、ある一定の社会政策的立場を代表する「傾向」を持っていたというのは矛盾のほうである。少なくともそうした「傾向」があったのであれば、それを問題視する必要があるが、「緒言」で

はそうした様子ほうがえない。

「緒言」を誰が書いたのかについては、原稿が残されておらず不明である。しかし、ヴェーバーが書かないといった『アルヒーフ』の「傾向」が書かれ、また、「緒言」には矛盾した表現があることからすれば、ヴェーバーは「緒言」を十分なものだと思えることはできなかったのではないか。というのも、『客観性』では旧『アルヒーフ』の「傾向」が再度、「緒言」のような矛盾を含まないかたちで論じられるからである。

3. 『アルヒーフ』の「傾向」について

以下に引用する『客観性』冒頭の問題設定は、通常、『客観性』が論じられても素通りされてしまいがちなものである。しかし、これまで見てきたとおり、この問題設定はヴェーバーがまず最初になさなければならなかったものだと思う。

われわれの間で、社会科学なかんづく社会政策にかんする雑誌が、創刊されたり、新しい編集陣の手に移されたりする場合、通例、まず最初の問いとなされるのは、その雑誌の「傾向 Tendenz」は何か、というものである。われわれもまた、この質問に答えられないわけにはいかない。[Archiv 19: 22-3=MWGI/7: 142=折原補訳: 25]

すでに紹介したヤッフェ宛の手紙にあったとおり、ヴェーバーは自分の「かなり長い論文⁹⁾」で、『アルヒーフ』の「傾向」についてまっさきに問題とした。

3-1. 科学の権能

ヴェーバーは、社会科学はかつて「実践的な観¹⁰⁾点」から出発したという。

国家による経済政策上の特定の施策に価値判断を下すことが、われわれの科学の最も卑近な、当初には唯一の目的であった。[Archiv 19: 24=MWGI/7:

145=折原補訳: 28]

社会科学は国家の価値判断のための「技術」であり、事実を認識すること以上に政策判断を下すことが求められた。そこでは、事実認識と価値判断とは渾然一体となり、それを区別するということもなかったわけである¹⁰⁾。

こうした事情は徐々に変化してきたが、それでも「存在 Sein」と「当為 Sollen」を峻別して認識することはなかなかできなかったとヴェーバーはいう。社会科学の出発点で不分明だった「存在」と「当為」は、その後も原理的に区別されることはなかった。古典派経済学やマルクス主義、そして歴史学派によってもこの区別は十全に行われることはなかった。とくにシュモラーをはじめとする歴史学派は、「特定の「経済的世界観」から価値判断を生み出すことができるし、またそうしなければならないという不分明な見解」を持っている。ヴェーバーは、こうした見解を明確に拒否する。ただし、それは経験科学が価値判断を取り扱えないということを意味するものではない¹¹⁾。

批判は、価値判断の前でも立ち止まりはしない。問題は、理想や価値判断にかんする科学的批判とは、何を意味し、何を目的とするのか、という点にある。[Archiv 19: 25=MWGI/7: 146=折原補訳: 30]

ここに端的に示されているとおり、ヴェーバーのいう社会科学は価値判断を批判するものなのである。科学から価値判断を生み出すことができるという錯覚をいっさい捨て去ることをヴェーバーは求めるが、それは価値判断を科学から追放するのではなく——それは「没価値性」という似非価値自由である——、価値判断を科学的に批判するという要請なのである。

ヴェーバーはこのあと、価値判断の科学的批判について、科学の権能を述べるかたちで論じている。

科学の権能として、まず第一に、科学は目的が与えられた場合、その目的に適合的な手段を確定し、

特定的手段によってその目的を達成できる可能性を見積もることができる。それは間接的には、その目的を設定すること自体の実践的意味についての批判を行うことができるということである。第二に、ある目的の達成のために必要とされた手段を適用した際に、当の目的以外に、どんな随伴結果が生じるかを示すことができる。そうすることで、特定の目的を達成するために、他のいかなる価値が犠牲にされたのかを知らせることができるのである。ヴェーバーは以上を科学の「技術的批判」と呼ぶ。さらに第三に、ヴェーバーは、「意欲する人間」にたいして科学は「意欲されたものそのものの意義を知らせることができる」という。つまり、具体的な目的の根底にある（ありうる）「理念」を指し示し、当人に自覚させることができるというのである。それは「人間の文化生活にかんするあらゆる科学のもっとも本質的な課題の一つ」とまでヴェーバーはいつている。そして第四に、ヴェーバーは「価値判断の科学的な取り扱いは、さらに進んで、意欲された目的とその根底にある理念をたんに理解させ、追体験させるだけでなく、とりわけ、それらを批判的に「評価する」ことも教えたい」という¹²⁾。

価値判断にかんする科学的な扱いは、こういう目的を掲げることで、意欲する人間を助けて、彼の意欲の内容の根底にある究極の公理を、つまり、彼が無意識のうちにそこから出発していたり——首尾一貫性をもつのなら——出発しているといわねばならないような究極の価値基準を、みずから反省させることができるのである。[Archiv 19: 7=MWGI/7: 149=折原補訳: 35]

以上のように、科学は「技術的批判」のみならず、価値判断の背後にある価値理念を自覚させ、さらにそれを批判的に評価させるという権能をもつとヴェーバーは考えていた。

このように、理想や価値判断にたいして科学的批判を行う経験科学をこそヴェーバーは「社会科学」

としたのだが、『アルヒーフ』に掲載される論考が、ある一定の「傾向」をもつとすればどうだろうか。『アルヒーフ』で科学的批判がなされるのではなく、科学によって価値判断が導き出されたり、ある特定の社会政策に偏って支持を表明したりするとすれば、それは『アルヒーフ』という「科学的雑誌」の存在を根底から危機に陥れることになるだろう。ヴェーバーが『アルヒーフ』の「傾向」について問題として論じるのは、まさにこの科学性をクリアするためである。

3-2. 新『アルヒーフ』の不偏不党性

さて、本稿冒頭で問題とした一文が含まれる第14段落は、実はヴェーバーが『アルヒーフ』の「傾向」について論じる箇所なのである。以下では第14段落を中心に詳しく内容を追いかけていきたいのだが、まずは問題の一文が出てくる直前まで、内容を吟味しておきたい。

ヴェーバーは第13段落末尾において、旧『アルヒーフ』創刊当時からの特長として、どんなに政治的な立場が違う者たちでも、科学研究のためにはいっさい排除しないという編集方針があったし、新『アルヒーフ』でもそれを踏襲することを明言している。

この雑誌の特性は、むしろ当初から、鋭い政治上の対立者も科学的研究のために相会するという点にあったし、編集者にかんするかぎり、今後もそうである。この雑誌は、これまで「社会主義」の機関誌だったことはないし、将来「ブルジョワ」の機関誌ともならないだろう。この雑誌は、科学的な議論の地盤に立とうとする者なら何びとも寄稿者の範囲から排除しはしない。[Archiv 19: 33=MWGI/7: 157=折原補訳: 49]

誌面では闊達な議論が展開されなければならないし、寄稿者、編集者の別なく、誰に対しても容赦なく批判は展開されてしかるべきであり、だれかが特別な扱いを受け、批判から守られるようなことはいっさ

いない [Archiv 19: 33=MWGI/7: 157=折原補訳: 49]。さらにヴェーバーは次のように強く求めている。

それ(容赦ない批判——引用者)に耐えられない人、自分自身とは異なる理想のために動いている人とは科学的認識のためにも協働したくないという立場の人は、この雑誌から遠ざかってほしい。

[Archiv 19: 33-4=MWGI/7: 157-8=折原補訳: 49]

文脈上、ここは、誰かを排除するという意思表示ではなく、『アルヒーフ』では思想的立場にとらわれない議論を堅持するという宣言であることは明瞭だろう。つまり、この『アルヒーフ』には自分の理想のために動いているひとたちが集り、フェアな科学的議論を行う場だという意味である。

ここで段落は第14段落へと移る。第14段落の出だしは以下のとおりである。

ところでもちろん——われわれの誤解でなければ——この最後の文言からは、実際には目下のところ、残念ながら一見したより以上のことが語られている。

[Archiv 19: 34=MWGI/7: 158=折原補訳: 49]

確認しておけば、「この最後の文言」が指すのは、第13段落の最後にある、『アルヒーフ』は自分の理想のために動いている人たちが集い、フェアな科学的議論をなす場だという宣言である。それが、「一見したより以上のことが語られている」とはどういうことか。

まず第一に、すでに示唆したとおり、政治的な対立者と——社交上ないしは観念上の——中立地帯で偏見なく相会する可能性には、遺憾ながら経験上いたるところに、特にドイツの事情のもとでは、心理的な限界がある。[Archiv 19: 34=MWGI/7: 158=折原補訳: 49-50]

当時のドイツの事情として、実際に自分の理想とは違う人たちつまり「政治的な対立者」どうしが、不偏不党な雑誌という「中立地帯で偏見なく相会する」ことは「心理的な限界がある」とヴェーバーはいう。理想が違い政治的立場は違っても寄稿を拒まない雑誌であっても、現実にそこにありとあらゆる理想を持った人が寄稿することは寄稿者によって「心理的」に制限がかけられる。『アルヒーフ』を取り巻くドイツの様子に踏み込まず、あえて単純化するが、要するに、自由に議論ができる場を提供しても、そこでフェアで科学的な理想をぶつけ合う議論はなかなか実現しないということである。特にドイツでは「熱狂的な党派的偏狭」と「未熟な政治文化」によって、政治的立場の違う者たちが議論のアゴーンへやってくることを「心理的」に拒み、自分の党派に閉じこもる。これをヴェーバーは嘆き批判しているのである。

さて、こうした「心理的な限界」は「われわれのような種類の雑誌」つまり『アルヒーフ』の場合には特に顕著に現れてしまうとヴェーバーは続ける [Archiv 19: 34=MWGI/7: 158=折原補訳: 50]。このあとに、本稿冒頭で問題とした一文が出てくる。つまり、私がひっかかったのは、『アルヒーフ』がどんな雑誌であるかをヴェーバーが論じ始めた、もう少し先取りしていってしまえば、『アルヒーフ』の「傾向」についてヴェーバーなりの見解を述べようとした出だしなのである。

節をあらためて、次には、問題とした箇所が続く部分を検討していくが、その前に今一度確認しておこう。科学的雑誌が不偏不党性を貫いても、結果的にどのような雑誌になるかは、寄稿者の「心理的」な判断に委ねられてしまうと述べ、特に『アルヒーフ』は、そうした寄稿者の心理的動向が顕著に現れる雑誌だと述べた直後に、問題の一文は出てくる。

3-3. 雑誌の「性格」

問題とした一文の直接の検討は最後に行うとして、そのあとに続く内容を吟味したい。ヴェーバーは、

次のように述べる。

したがって、ある具体的問題にたいする一般的関心の影響を受けて刊行される雑誌の誌面に、通例、寄稿者として相集うのは、特定の具体的状態が、自分の信じる理想的な価値と矛盾し、その価値を脅かすかに見えるために、その問題に個人的な関心を向ける人々なのである。[Archiv 19: 34=MWGI/7: 158 =折原補訳: 50]

ここでは、すでに触れた第13段落の表現よりももう一步踏み込んだ表現がなされている。すなわち、ある「具体的な問題」を取り扱う雑誌には、その具体的状況が「自分の信じる理想的な価値と矛盾し」ていて、「その価値を脅かす」と考える人びとが寄稿する。この表現はヴェーバーのいう「文化人」を想起させるものである。

世界に生起している事象は、ただそれだけでは無秩序に茫漠と拡がっているだけで、そこにあらかじめ「事実」や「問題」なるものが存在しているのではない。「事実」認識は、「つねに特殊に固有な観点からなされる認識」[Archiv 19: 56=MWGI/7: 189 =折原補訳: 94]であり、それに意味と意義を与えるからこそ「事実」として認識される。「問題」はその人に理念や理想があるからこそ、そこから知るに値する、取り上げるに値する「問題」とみえてくる。

すべての文化科学の超越論的前提は、われわれが特定の、あるいは、およそ何かひとつの「文化」を価値があると思うことではなく、われわれが世界に対して意識的に態度を決め、それに意味を付与する能力と意思とを与えられた文化人であるということである。[Archiv 19: 55=MWGI/7: 188-9=折原補訳: 93]

「文化人」である寄稿者は、その人の理想や価値から意味を見いだした「問題」を論じるために『アルヒーフ』に寄稿する。そうであれば、ここには「似

通った理想の選択的親和性」がはたらくことになってくる。

すると、似通った理想の選択的親和性のために、そうした寄稿者の集団が結束し、そこから新たな寄稿者も採用することになり、こうした事情が、その雑誌に少なくとも実践的・社会政策的な問題の取扱いにおいて、ある特定の「性格 *Charakter*」を刻印することになるであろう。[Archiv 19: 34=MWGI/7: 158 =折原補訳: 50-1]

「労働者問題」に関心を向ける人びとは、そこに自らの価値や理想との関わりを見ている。だからこそ、「労働者問題」を扱う『アルヒーフ』には、それに関心を向けるような似通った価値や理想を持つ人びとが集まってくるのである。それは、編集者の恣意的選別ではなく、「似通った理想の選択的親和性」が、彼らを『アルヒーフ』へと誘う。そうなれば、その雑誌には「ある特定の「性格 *Charakter*」」が刻まれることになるのは、ある意味自然ななりゆきである。ヴェーバーはそれを「つねに避けがたい「随伴現象」」[Archiv 19: 34=MWGI/7: 158 =折原補訳: 51]と述べている。

以上、一般論として「ある具体的問題」のために刊行された雑誌が帯びる「性格」について述べてきたヴェーバーは、第14段落のこれ以降の部分でそれを『アルヒーフ』に適用してあらためて議論していく。引き続き、第14段落を追ってみよう。

ヴェーバーは旧『アルヒーフ』が創刊された当時は「従来の語義における「労働者問題」という特定の實踐的問題が、社会科学的な論議の前面に立ち現れた時期」[Archiv 19: 34=MWGI/7: 158-9=折原補訳: 51]だったと述べ、次のようにいう。

この雑誌が取り扱おうとした問題に、最高かつ決定的な価値理念を結びつけ、したがって、その最も規則的な寄稿者となった人々は、まさにそれゆえ、同時に、当の価値理念によって、同じあるいはよく似

た色彩を施された文化観の代表者でもあった。
[Archiv 19: 34-5 = MWGI/7: 159 = 折原補訳: 51]

「労働者問題」の雑誌として創刊され、刊行される以上、そこに集うのはそれに自分の理想を結びつける人々である。『アルヒーフ』は科学性を保持し、不偏不党性を堅持して、「ひとつの「傾向 Tendenz」を追う考えをきっぱり拒否した」が、寄稿者によってそこに「ひとつの「性格」が生み出されてしまった [Archiv 19: 35 = MWGI/7: 159 = 折原補訳: 51-2]。これは、「つねに避けがたい随伴現象」なのである。雑誌についての一般論を、今度は『アルヒーフ』に適用していることは明白であろう。

この「性格」は、「規則的に寄稿する執筆陣によって形成された」と、これまた先の一般論を『アルヒーフ』に適用しつつ述べたヴェーバーは、その執筆陣は、大きく見解を異にする人びとであったとはいえ、以下の点で共通認識があったという。つまり、(1)「労働者大衆の肉体的健康の保護」と「われわれの物質的また精神的文化財へのかれらの参与の増進」という目的と、(2)「物質的な利害関係の領域にたいする国家の介入と現存の国家秩序ならびに法秩序の自由な進展との結合」という手段を考えていたこと、そしてさらに (3) 現在の「資本主義の発展を肯定し」また「不可避である」としていたことである [Archiv 19: 35 = MWGI/7: 159 = 折原補訳: 52]。特に (3) の資本主義の発展を不可避のものとしたことは、実際、「あらゆる立場の人びとが科学的議論に参加することに直接役立つ」たし、旧『アルヒーフ』にとっては、「ひとつの強み」であり、「その存在の正当性をしめすもののひとつ」でさえあったとヴェーバーは評して、第14段落は閉じられる [Archiv 19: 35 = MWGI/7: 159-60 = 折原補訳: 52-3]。

3-4. 「性格」と「傾向」の区別

これまで見てきたように、雑誌の帯びる「性格」は、編集者が不偏不党性を貫いていても、寄稿者に

よって刻印付けられるものである。しかし、この「性格」のために、こんどは編集者が寄稿者を選別しはじめれば、それはその雑誌の「性格 Charakter」ではなく「傾向 Tendenz」と呼ぶべきものとなる。

この意味における「性格」の発展が、ある科学雑誌にとり、科学的研究の不偏不党性を脅かすひとつの危険を意味しうるし、実際、寄稿者の選択が計画的に偏るようなことがあれば、そうならざるをえない、ということは明白である。というのも、そういうばあいには、ある「性格」の育成はある「傾向」の存立と実際同じことになるからである。[Archiv 19: 35 = MWGI/7: 160 = 折原補訳: 53]

ヴェーバーの「性格」と「傾向」というふたつの概念に込めた意味の違いはあきらかだろう。「性格」は、寄稿者の側から形成されていくものであり、雑誌には不可避なものであるのに対して、「傾向」は編集者の価値判断によるものであり、恣意的に寄稿者の選別・排除がなされる。この「性格」と「傾向」との区別から、ヴェーバーは旧『アルヒーフ』は——社会民主主義者であり、「アカ」だとレッテル張りをされたブラウンが編集者だったとしても——、寄稿者を選別し特定の人物を排除するような「傾向」を持たなかったと断言でき、それを新『アルヒーフ』の編集者たちも踏襲すると宣言するのである。

編集者（ヴェーバーをはじめとする新『アルヒーフ』の編集者——引用者）は、この事態によって課せられる責任を、十分意識している。編集者は、雑誌の性格を計画的に変更することを考えていないし、ましてや、寄稿者の範囲を特定の党派の見解をもつ学者たちに故意に制限することによって、その性格を作為的に保持しようとも思っていない。編集者は、雑誌の性格を与えられたままに引き受け、今後のさらなる「発展」を期して待つのみである。[Archiv 19: 35-6 = MWGI/7: 160 = 折原補訳: 53]

これまでみてきたように、ヴェーバーが『客観性』でおこなった『アルヒーフ』の「傾向」にかんする議論は、「緒言」でなされたそれとはかなり違うものである。「緒言」では、旧『アルヒーフ』にはある一定の社会政策上の立場が認められるという意味で「傾向」があったとしていた。しかし、ヴェーバーは「傾向」と「性格」という語を区別し、「緒論」以上に精密な議論を展開し、『アルヒーフ』には特定の「傾向」はないと断言したのである。

4. 科学と実践の結びつき

第13段落末尾から、14、15段落と詳細に論じてきた。ここで、これまでの議論の流れを便宜的に番号をふって示しておきたい。

- ①『アルヒーフ』は自分自身の理想のために奮闘する人びとが会する場である（不偏不党性の宣言）
- ②しかし、雑誌が科学的な不偏不党性を貫いても、執筆者の側で心理的に雑誌を選んで寄稿するため、実際の誌面にあらゆる立場の人びとが現れることはない（雑誌に不可避な心理的随伴現象）
- ③問題としている一文
- ④ある具体的問題のために刊行される雑誌には、その具体的状況が自分の理想と矛盾し、その価値を脅かす危険があると思う似通った価値理念を持つ執筆者が集うため、どれほど編集者が科学的な不偏不党性を貫いても雑誌は寄稿者によって一定の「性格」を帯びてしまう（雑誌が「性格」を帯びる一般論）
- ⑤旧『アルヒーフ』も同様に、「労働者問題」を課題として創刊、刊行されたために、編集者は不偏不党性を貫いたが、当時の似通った価値理念を持つ執筆者が集まり、一定の「性格」を帯びた（旧『アルヒーフ』の「性格」）
- ⑥しかし、その「性格」を越えて、編集者が恣意的な寄稿者の選別、排除を行えば、これはその雑誌に「傾向」を持たせることになる（「性格」と「傾向」の峻別）

⑦旧『アルヒーフ』も新『アルヒーフ』もそうした「傾向」を帯びるような編集はいいくない

さらに、問題としている③の箇所の原文を再度引用して、ここが何を意味しているのかを考えたい。

An sich als ein Zeichen parteifanatischer Beschränktheit und unentwickelter politischer Kultur unbedingt bekämpfungswert, gewinnt dieses Moment für eine Zeitschrift wie die unsrige eine ganz wesentliche Verstärkung durch den Umstand, daß auf dem Gebiet der Sozialwissenschaften der Anstoß zur Aufrollung *wissenschaftlicher* Probleme erfahrungsgemäß regelmäßig durch *praktische* »Fragen« gegeben wird, so daß die bloße Anerkennung des Bestehens eines wissenschaftlichen Problems in Personalunion steht mit einem bestimmt gerichteten Wollen lebendiger Menschen. [Archiv 19: 34=MWGI/7: 158]

ヴェーバーは、社会科学の領域において、「科学的問題 *wissenschaftlicher Probleme*」が提起される際の最初のきっかけは「実践的な「問題」 *praktische* »Fragen«」であると述べている。科学と実践は切り離された別々のところにあるのではない。ここでヴェーバーは *Probleme* も *Fragen* も、ともに複数形を使っている。ところが、それを受けて「ある科学的問題 *ein wissenschaftliches Problem*」と述べる箇所では *Problem* に単数形を使い、前者とは明確に区別している。前者については「個々のさまざまな科学的問題」であるのに対して、後者はすでにみた「文化人」のあり方から考えれば「ある科学的問題」*「科学的問題として像を結んでいるもの」*を示すと考えられる。とすれば、「個々のさまざまな科学的問題 *wissenschaftlicher Probleme*」は「さまざまな実践的な「問題」 *praktische* »Fragen«」に端を発しているが、そうであれば「ある科学的問題 *ein wissenschaftliches Problem*」がひとつの問題として

とらえられるのは「個人の中で科学と実践という二つが結びあって in Personalunion¹³⁾」存在しているためであるとヴェーバーは述べようとしたのではないだろうか。というのも、われわれは「文化人」である以上、実践的関心つまり価値や理念なしに科学的問題を考えることは不可能であるからだ。とりあえず、折原補訳を私の解釈で修正してみると、以下のようになる。

すなわち、社会科学の領域においては、科学上の問題が提起され展開される最初のきっかけは、経験上、実践的な「問題」によって与えられるのが普通である。だから、科学と実践のふたつが結びあって科学的な問題が存立すると認めること自体、ある特定の方向に向けられた、生ける人間の意欲をそこに見ないわけにはいかない。こうした事情があるのだ。

上記の解釈で、読み直してみよう。①科学的不偏不党性を掲げる『アルヒーフ』のような雑誌にすら、②実際のところさまざまな理想や価値を持った人びとが寄稿するということはなく、どうしても似通った理想を持つ人たちが集うことになってしまう。なぜなら、③社会科学において「科学的問題」は実践に端を発するのが通例であり、「科学的問題」は科学と実践とが結びついて存立しているために、「科学的問題」を論じれば、その個人の実践的な意欲、理想、価値も問われることになるからである。そうであれば④雑誌に論考を寄稿するにあたり、寄稿者は、排除されずに論考を掲載してくれさえすればいいというのではなく、自分の理想や価値からしてどの雑誌に寄稿するのが最もふさわしいかという点に関心を向ける。だから、⑤寄稿者によって寄稿先が選別され、雑誌に一定の「性格」が刻まれてしまい、それが再生産されていくのは不可避なのである。それは『アルヒーフ』とても例外ではない。しかし、⑥編集者が恣意的党派的に寄稿者の選別を行いはじめれば、それはひとつの「傾向」となり、その雑誌の科学的不偏性を毀損することとなる。これは編集

者の価値判断に他ならず、ヴェーバーにとって許すことのできないものであった。それゆえ、ヴェーバーは、⑦この「傾向」を生むような恣意的な編集は『アルヒーフ』には無縁だと断言したのである。

以上のように、in Personalunion を「個人の中で科学と実践という結びあって」という意味で解釈すると無理なく前後がつながり、何より、雑誌の「傾向」を論じるに際して、わざわざ「性格」という概念を導入して『アルヒーフ』の雑誌としてのあり方を吟味した意味がみえてくるのではなからうか。

5. ヴェーバーの「科学的問題」とは

当該箇所の私の解釈の当否については、大方の批判を待つしかないが、ひとまず本稿では、ヴェーバーのいう「科学的問題」は、科学と実践とが切り結ぶ位置で生み出されるものだという結論へと至った。これはヴェーバーの「科学」とはいかなるものか、そしてヴェーバーが対峙した「科学」がどんなものであったのかを考えるために重要な点であり、単に『客観性』のなかにある一文の解釈問題で終わらせるわけにはいかない。

「神々の闘争」の時代にあって、ある神を信じることは他の神に侮辱を与えることになることとヴェーバーが述べたのは、1917年の講演『職業としての学問』においてであった [MWGI/17: 100-1=学問: 32]。ただし、この「神々の闘争」という時代認識は、『客観性』の段階ですでにヴェーバーのなかに明確に認められる。すなわち、「認識の木の実を食べた一文化期の運命」として「知っておかねばならないこと」として、ヴェーバーは次のようにいう。

世界に起こるできごとが、完全に研究され尽くされても、そこからその意味を読み取ることはできない。そうではなく、意味そのものを創造できなければならぬ。「世界観」とは、決して経験的知識の進歩で生み出されたものではない。われわれを最も強く突き動かす最高の理想は、どの時代も他の理想との

闘争のなかで現れるのである。その際、他人にとって他の理想が神聖なのと同様、われわれの理想は自分にとって神聖なものである。[Archiv 19: 30=MWGI/7: 153=折原補訳: 41]

自分の理想や価値——ここでは世界観と呼ばれるもの——が、われわれを大きく突き動かすのであり、科学的問題もそれなしでは生まれようがない。間違っているのではないのは、おのれの価値や理想あるいは世界観は科学が生み出すものではないということである。そうではなく、最高の理想こそが「意味」を生み出し、科学を生み出す原動力となるのである。

周知のように、ヴェーバーは、「世界観」としての唯物史観を断固拒否した。神々の闘争と呼ばれる諸価値が衝突する時代にあつて、「本来の」唯一「真なる」、「究極において決定的な」ものを措定することをヴェーバーは認めない。ただ、それは何も唯物史観についてだけではなかった。ヴェーバーは19世紀から20世紀の世紀転換期の「科学創成熟」[Archiv 19: 43=MWGI/7: 171=折原補訳: 68]のなかに叢生する諸「科学」について、次のように述べている。

ほとんどすべての科学が、文献学から生物学にいたるまで、時にたんに専門的知識のみでなく「世界観」の生産者でもあるという要求を掲げてきた。そして、近代の経済変動の巨大な文化意義と、特に「労働者問題」の際立った意義とに押されて、自己批判のない認識には根絶やしがない一元論的傾向が、この道に滑り込んだのも当然であろう。[Archiv 19: 169=MWGI/7: 42=折原補訳: 66-7]

一元論的傾向とヴェーバーが呼ぶのは、唯物史観はもちろん、当時ヴィルヘルム・オストヴァルトやエルンスト・ヘッケルらが熱心に唱えた自然科学的・生物学的一元論であり、また、アルフレート・プレーツをはじめとした優生学、人種生物学などの諸「科学」である。これらの世紀転換期の諸「科学」は、自らが価値を生み出す、科学こそが世界観を提示で

きるものとして登場している¹⁴⁾。こうした「科学」は、その成立にあつて自身の理想や価値が介在していることを十分に自己批判せず、事実認識と価値判断を峻別することなく、あたかも、その「科学」がひとつの価値を示すことができるとしているのである。しかし、それはまさしくおのれの価値判断を「科学」と僭称することであり、ヴェーバーはそれを見破って強く批判するのである。だから、たとえば「文化事象の原因をもっぱら「人種」に求める類いの因果的遡行」をおこなうような人種理論、優生思想は、「単にわれわれの無知を明かしするだけのことでしかない」と断ずるのだ [Archiv 19: 43=MWGI/7: 170=折原補訳: 67]。

ヴェーバーのいう「科学的問題」は、それを成立させる理想や価値までを射程に収めることではじめて「科学的問題」となる。ヴェーバーの「科学的問題」の捉え方は、当時の諸「科学」をにらみつつ、そのあり方を根底で問うものであるとっていいだろう。これはまさしくヴェーバーの「価値自由」な態度そのものでもある。もはや、『客観性』の一文の解釈ではなく、ヴェーバーの「科学」、あるいは、ヴェーバーを取り巻く当時の諸「科学」へのヴェーバーの態度というところにまで至ろうとしているが、それについては別稿を用意することとして、ヴェーバーの「科学的問題」の意味をあきらかにした地点で本稿は閉じることにする。

凡例

ヴェーバーからの引用は、『マックス・ヴェーバー全集』*Max Weber Gesamtausgabe*を底本とする。略号は『全集』とし、参照ページを記載する際の略号としてMWGを使い、そのあとにAbteilungをローマ数字で、Bandを算用数字で示す。また、『アルヒーフ』については、本文中でも指摘したとおり、その前に「新」「旧」をつけて区別を行うが、参照ページを記載する際の略号はArchivで統一し、そのあとに巻数を記すことで新旧の区別がわかるようにする。

『マックス・ヴェーバー全集』*Max Weber*

Gesamtausgabe, Tübingen : J.C.B. Mohr (Paul Siebeck)

MWGI/7: *Zur Logik und Methodik der Sozialwissenschaften : Schriften 1900-1907*, herausgegeben von Gerhard Wagner in Zusammenarbeit mit Claudius Härpfer, Tom Kaden, Kai Müller und Angelika Zahn, 2018 [— Die „Objektivität, sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis = 1998 富永祐治・立野保男訳, 折原浩補訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波書店, 折原補訳と略記, — Geleitwort = 1998 折原浩訳「緒言」, 前掲折原補訳所収].

MWGI/12: *Verstehende Soziologie und Werturteilsfreiheit : Schriften und Reden 1908-1917*, herausgegeben von Johannes Weiß in Zusammenarbeit mit Sabine Frommer, 2018 [— „Energetische, Kulturtheorien]

MWGI/17: *Wissenschaft als Beruf, 1917/1919 ; Politik als Beruf, 1919*, herausgegeben von Wolfgang J. Mommsen und Wolfgang Schluchter in Zusammenarbeit mit Birgitt Morgenbrod, 1992 [— *Wissenschafts als Beruf* = 2016 野崎敏郎訳『職業としての学問 (圧縮版)』晃洋書房, 学問と略記].

また、『アルヒーフ』については、Archivのあとに巻数を示すことで略号とする。

旧『アルヒーフ』*Archiv für Soziale Gesetzgebung und Statistik*, herausgegeben von Heinrich Braun.

Archiv 1: [— Zur Einführung, 「創刊によせて」と記す]

Archiv 18: [— 1998 折原浩訳「移行予告」前掲折原補訳所収, 「移行予告」と記す — Abschiedwort = 1998 折原浩訳「告別の辞」前掲折原補訳所収, 「告別の辞」と記す].

新『アルヒーフ』*Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, herausgegeben von Max Weber, Werner Sombart, und Edgar Jaffé.

Archiv 19: [— Geleitwort = 1998 折原浩訳「緒言」前掲折原補訳所収, — Die „Objektivität, sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer

Erkenntnis = 1998 富永・立野訳, 折原補訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』]

注

- 1) 出口のヴェーバー研究にかんしては、以前論じたことがある [三管 2014: 57-73]。
- 2) 出口訳はいくつかの訳書に収録されているが、私が入手して使用したのは、河出書房新社から1982年に出版された『完訳・世界の大思想 1 ウェーバー 社会科学論集』という論文集である。ここでは、『客観性』の他、『R・シュタムラーの唯物史観の「克服」』や『社会学・経済学における「価値自由」の意味』あるいはドイツ社会学会におけるヴェーバーの発言など、重要な科学論、方法論が収録されていた。
- 3) 本稿執筆の最終段階で、仏教大学の野崎敏郎氏に当該箇所および関連するところの解釈について詳しくご教示いただいた。記して感謝する。ただし、当該箇所について野崎氏の示された解釈と私のそれとは異なっている。
- 4) 『学問論集』*„Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre,“*に収録された『客観性』では、引用文中にある *wissenschaftlich* のゲシュペルトが落とされている。先に引用した折原補訳は『アルヒーフ』版を底本としているため、「科学的」には傍点が付されているが、次の注5に引用するそれ以外の訳文は『学問論集』版を底本としているため、傍点はない。
- 5) 折原補訳の他に日本語訳には、折原補訳のもとになっている富永祐治・立野保男訳『社会科学方法論』(岩波文庫, 1936年), 戸田武雄訳『社会科学及び社会政策の認識の「客観性」』(『社会科学と価値判断の諸問題』有斐閣, 1937年), 出口勇蔵訳『社会科学および社会政策の認識の「客観性」』(『世界大思想全集21・ウェーバー』河出書房, 1956年), 出口勇蔵訳(『世界の大思想23・ウェーバー政治・社会論集』河出書房, 1965年), 徳永恂訳『社会科学および社会政策的認識の「客観性」』(『現代社会学大系5 ウェーバー社会学論集——方法・宗教・政治』青木書店, 1971年), 祇園寺信彦・祇園寺則夫訳『社会科学の方法』(講談社, 1994年)がある(出口訳については、これ以外の

河出書房、河出書房新社のいくつかのヴェーバーの論文集に再録されている)。これらでは、当該箇所は以下のように訳されていた。すべて下線は引用者による。

即ち社会科学の領域においては、科学的諸問題の展開の動機は経験からみて実践的「諸問題」によつて与えられるのが普通であり、ために一つの科学的問題の存在を単に認めることだけがすでに、或る一定の方向に向けられた生ける人間の意欲と個人的に結びついてゐるのである。[富永・立野訳：28]

即ち、社会諸科学の領域に於て学問的問題の展開への動力は、経験によれば通例実践的「問題」によつて与えられる。従つて学問的問題の存立をたゞ承認することが〔それだけで既に〕いける人間の特定の方向に向けられた意欲と人的結合にあるといふ事情によつて全く本質的に強められる。[戸田訳：16]

その事情というのは、科学的な問題の展開を刺激するものは、経験的には、実践的な「問題」であるのが普通であり、したがって、ある科学的な問題が存在するということのみとめることすらがすでに、実践的な人間の、一定の方向をもった意欲と人格的にむすびついている、ということである。[出口訳 1956: 41] [出口訳 1965: 62]

つまり社会科学の領域では、科学的な問題の提出は、経験上かならずといっていいほど、実践的な「社会問題」によつて刺激をあたえられるのがふつうである。したがって、ある科学的問題の存在をただみとめることだけでも、生きた人間の、特定の傾向をもった意欲と個人的にむすびついている。[徳永訳：17]

すなわち、社会科学の領域においては、科学的な諸問題の提起へのきっかけは、経験上きまつて実践的な「諸問題」によつて与えられるのが通例であり、そのために、科学が問題とするに

足る問題がここにあると認めることそのことが、特定のある方向の意欲をもつ、生きた人々同士を個人的につなぎあわせる。[祇園寺訳：37]

折原補訳は、富永・立野訳からそのまま引き継いだ訳文であることがわかるだろう。また、富永・立野訳の後に現れた戸田訳、出口訳、徳永訳もほとんど同じ意味の訳文となっており、祇園寺訳は他の訳と大きく意味が異なる訳文となっている。ちなみに、Shils&Finchによる英訳(1949年)は、in Personalunion を personally と訳し、Julien Freund による仏訳(1965年)は une union Personnelle [*Personal-union*] としている。

- 6) ブラウンについては三笠 2014: 169-70の他、ブラウンの二番目の妻であるブラウン・フォーゲルシュタインによる伝記 Braun-Vogelstein 1932、および、水田 1985、亀嶋 1995、Lischke 2000なども参照。
- 7) ブラウンは「告別の辞」で、ヴェーバーが旧『アルヒーフ』に論考を寄せたと述べているが、それは、1894年の「東エルベ地方の農業労働者の状態の発展傾向」(第7巻)、および1902年の「書評：フィリップ・ロトマル『労働協約——ドイツ帝国の私法について』」(第17巻)のふたつである。また、ブラウンは何よりゾンバルトが多くの論考を寄せたと書いているが、たしかにゾンバルトは第2巻から10巻、14巻、17巻、18巻と計28本の論考を寄稿している(旧『アルヒーフ』第18巻巻末の Autoren-Register による)。
- 8) 原文には表題もノンブルもない。これは折原浩によつて訳出され、その際便宜的に「移行予告」という表題がつけられて、折原補訳『客観性』の165-9ページに収録された。ここでは折原の付けた表題にしたがってこの一文を指すことにする。
- 9) 『客観性』は書き出しの2段落の後はⅠとⅡとの二部構成となっており、Ⅱの部分はヴェーバー個人の見解であるが、Ⅰの部分は編集者一同がはっきり承認している内容としている [Archiv 19: 22=MWGI/7: 142=折原補訳: 162]。つまり、『客観性』は新『アルヒーフ』の綱領と呼ぶべき性格を持つ論文なのである。しかし、その『客観性』は新『アルヒーフ』創刊号(第19巻)の第2

論文となっており、第1論文はゾンバルトの „Versuch einer Systematik der Wirtschaftskrisen“ となっている。ここには、『客観性』が『アルヒーフ』にとっては規格外に長い論文だったという事情が絡んでいる。詳しくは『全集』第1部第7巻の『客観性』に付された「編者報告」を参照 [MWGI/7: 135-141]。

- 10) この段落は [Archiv 19: 24=MWGI/7: 145=折原補訳: 28] による。
- 11) この段落は [Archiv 19: 24-5=MWGI/7: 145-6=折原補訳: 28-30] による。
- 12) この段落は [Archiv 19: 25-7=MWGI/7: 146-9=折原補訳: 30-5] による。
- 13) この Personalunion は、通常、「人的連合国家」「同君連合」を意味する単語である。それは一君主が複数の国家を統治している国家連合を指すのだが、この文脈には合わない。また、「兼務」の意味もあり、in Personalunion という用例で「兼務で」を意味すると辞書などには書かれている。しかし、これまたこのままでは文脈に合わない。ここはあくまでも科学的問題を考えるという観念レベルの文脈であるので、Personalunion が神学で使用される場合の意味である「位格的結合」を想起させるものではないのかと推測した。「位格的結合」について、『新カトリック大事典』から抜粋する。

キリストの唯一・同一の位格（ペルソナ）において神の本性と人間の本性とが相互に混合・変化・分割・分離なく結合していることをいう。イエス・キリストの生と死と復活を通して神が歴史のなかで唯一無比、決定的な仕方で救いを与えているという新約聖書とキリスト教信仰の根本主張を、ヘレニズム世界の哲学的概念を用いて説明したものである。

この「位格的結合」からの類比で、ひとりの人格 persona のなかで、科学と実践（価値、理想）とがわかちがたく結合していることという意味に解した。

- 14) この点に関しては、本稿では十分に展開できない。オストヴァルトについては、ヴェーバー自身

が論じている [MWGI/12]。また、さしあたり Braune 2009, 橋本 2016, Neuber 2016などを参照。ヘッケルについては、佐藤 2015が体系的に論じている。また、オストヴァルトとヘッケルの関係や当時の思想状況については、たとえば竹中 2004などを参照。ブレーツおよび優生学、優生思想については米本 1989, 米本他 2000, 佐野 1993, 三管 2000, 市野川 2007 などを参照。

参考文献

- 安藤英治 1983 「アルヒーフ創刊前後」『創文』1983年3月号
- 安藤英治 1992 『ウェーバー歴史社会学の出立——歴史認識と価値意識——』未来社
- Braune, Andreas, 2009, *Fortschritt als Ideologie: Wilhelm Ostwald und der Monismus*, Leipzig: Leipziger Universitätsverlag.
- Braun-Vogelstein, Julie, 1932, *Ein Menschenleben: Heinrich Braun und sein Schicksal*, Tübingen, Reiner Wunderlich Verlag.
- 亀嶋庸一 1995 『ペルンシュタイン』みすず書房
- Lischke, Ute, 2000, *Lily Braun, 1865-1916: German writer, feminist, socialist*, Rochester, N.Y.: Camden House.
- 水田洋 1985 『知の商人——近代ヨーロッパ思想史の周辺』筑摩書房
- 三管利幸 2000 「マックス・ヴェーバーにおける「人種」概念の再検討」『社会思想史研究』第22号
- 三管利幸 2004 「『アルヒーフ』創刊前後再考——『客観性』論文の位置をめぐって」社会思想史学会『社会思想史研究』第28号 → 三管 2014
- 三管利幸 2014 「『価値自由』論の系譜——日本におけるマックス・ヴェーバー受容の一断面」中川書店
- Neuber, Matthias 2016 „Max Weber, Wilhelm Ostwald und die „energetischen Grundlagen“ der Kulturwissenschaft“, in : *Max Webers vergessene Zeitgenossen: Beiträge zur Genese der Wissenschaftslehre*, herausgegeben von Gerhard Wagner und Claudius Härpfer, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- 佐藤恵子 2015 『ヘッケルと進化の夢——一元論、

- エコロジー，系統樹』工作舎
新カトリック大辞典編纂委員会編 1996 『新カトリック大辞典』研究社
Weber, Marianne, 1926, *Max Weber: Ein Lebensbild*, Munchen; Tübingen: J.C.B. Mohr. (=1963 大久保和郎訳『マックス・ウェーバー』みすず書房)
米本昌平 1989 『遺伝管理社会——ナチスと近未来』弘文堂
米本昌平他 2000 『優生学と人間社会——生命科学の世紀はどこへ向かうのか』講談社
市野川容孝 2007 「社会学と生物学」『現代思想 総特集 マックス・ウェーバー』2007年11月臨時増刊号
佐野誠 1993 『ヴェーバーとナチズムの間——近代ドイツの法・国家・宗教』名古屋大学出版

The Meaning of Max Weber's "Scientific Problem"

MITOMA Toshiyukiⁱ

Abstract : This article aims to reveal the meaning of Max Weber's "scientific problem." I start by asking the meaning of a sentence in his article "Die 'Objektivität' sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis." This is not only a small interpretative question. I examine his "Objektivität" article as a platform of the new scientific journal, because that article appeared in the "first" volume of *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, edited by W. Sombart, E. Jaffe and Weber. However, strictly speaking, that was not the "first" volume because there was a preceding journal, *Archiv für Soziale Gesetzgebung und Statistik*, edited by H. Braun. Weber argued the "tendency" of both journals in order to keep new one's scientific approach and impartiality. He declared that both of them had no "tendency" but they unavoidably had some "character" because of their contributors. In this point, I establish that Weber's "scientific problem" did not exist only scientifically. He pointed out that man could come up with a scientific problem through one's idea of (social) practice. His idea of a "scientific problem" is important when we think how he constructed his science at the turn of the century when many new "sciences" appeared.

Keywords : Max Weber, science, practice, objectivity

i Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University